

い土木工事において関係する各省庁や会社の理解と積極的な取組み方に期待したい。また、最新のノウハウに対する会員諸氏の公正な評価が行われるようになることも大切であろう。後者については、難しい場合もあるが、読者がその内容を十分に評価できるだけのデータ、理論等を提示することが必要である。

現在、第VI部門の論文集は全会員に配布されているが、他の部門と同様に有料化される方向に進んでおり、早く他部門の論文集と同じレベルに達するよう望んでやまない。人によっては第VI部門の論文こそが今後の土木技術を発展させるものであると知っている人もあり、一方では論文集というよりも協会誌的な色彩が強いと知っている人もある。これは、この論文集が現在まだ過渡的な段階であるための評価であると考えられるが、良い論文が多く集まるようになってくれば、おのずと評価が固まるものと思われる。

このような現状をふまえ、会員諸氏のこれからますます多くの良い論文が投稿されるよう願ってやまない。

(筆者・Taketo UOMOTO, 東京大学助教授 生産技術研究所)

ビッグプロジェクト考

大 草 重 康



第VI部門が独立した部門として論文集を発刊してから早くも3年目に入った。私のように根が土木の門外漢である者にとって、この論文集は大変ありがたく、従来の土木学会誌からも論文集からも得られなかった知識を得ることがで

きる。一方、第VI部門の編集が他の部門に比べて苦勞が多いということも、編集調整会議に出席させてもらっている関係上わかっているつもりである。そのようなことを承知のうえで日頃考えていることを少しばかり書かせてもらうことにする。

世の中が不況になると大型土木工事の企画といったものが必ず話題になる。土木技術者にとって大変ありがたいことではあるが、そのことと世間一般が大型土木工事をどう思っているかということは別問題であろう。まして、ある大型土木工事が本当に「後世への最大遺物」になるかどうかというような根元にかかわる問題が真剣に論じられたということを開いたことはない。社会資本の

充実ということが簡単にいわれているが、大型土木工事や公共投資が文句なく有用な社会資本に転化すると信じるのも、あまりに楽観的にすぎるのではないだろうか。

内村鑑三という人は、日本の近代思想史上に巨大な足跡を残した人である。広井公式で知られる広井勇とともに札幌農学校のクラーク先生の同門であり、内村の一高時代の教え子に、後に信濃川大河津分水工事をなしたとげたキリスト者でありエスペランティストであった青山士がいる。内村が1894年夏にキリスト教徒の夏期学校で行った「後世への最大遺物」という講演は特に影響が大きいものであるが、その中で彼は後世へ遺すものとして「お金」、「土木工事」、「思想(文章)」を挙げたうえ、どれも実業家になってお金を遺せるわけではなし、土木技術者になれるわけではなし、文筆家になれるわけではないと知っている。結論として内村は誠実に生きる個々人の生き方が最大の遺物になるのだと知っている。幸いにしてわれわれは、内村のいう遺物の中の土木の分野に関連しており、その学会の会員である。現在行われつつある大小の土木工事、あるいは大型プロジェクトといったものが、内村鑑三のいう意味で後世への遺物になり得るのかどうか検討してみる必要がありはしないだろうか。また大河津分水完成時に青山士が書き残した「万象に天意を覚めるは幸なり、人のため、国のため」というような気持に会員大多数がなっているのかどうか。第VI部門の論文集がこのような内容にふみ込んだ討論の場になることを期待している。青山士が天に感謝しながら完成し、後世への遺物になると信じて疑わなかった大河津分水でさえ、後年に種々の問題を遺すことになった事実を忘れてはなるまい。

(筆者・Shigeyasu OKUSA, 東海大学教授
海洋学部海洋土木工学科)

3年目を迎えた第VI部門論文集に望む

河 上 省 吾



第VI部門論文集編集委員会が企画力とそれを着実に実現する実行力とによってすばらしい論文集を作ってくれたことにまず敬意を表わします。

土木学会の構成員は大学・官庁、建設業、コンサルタント、土